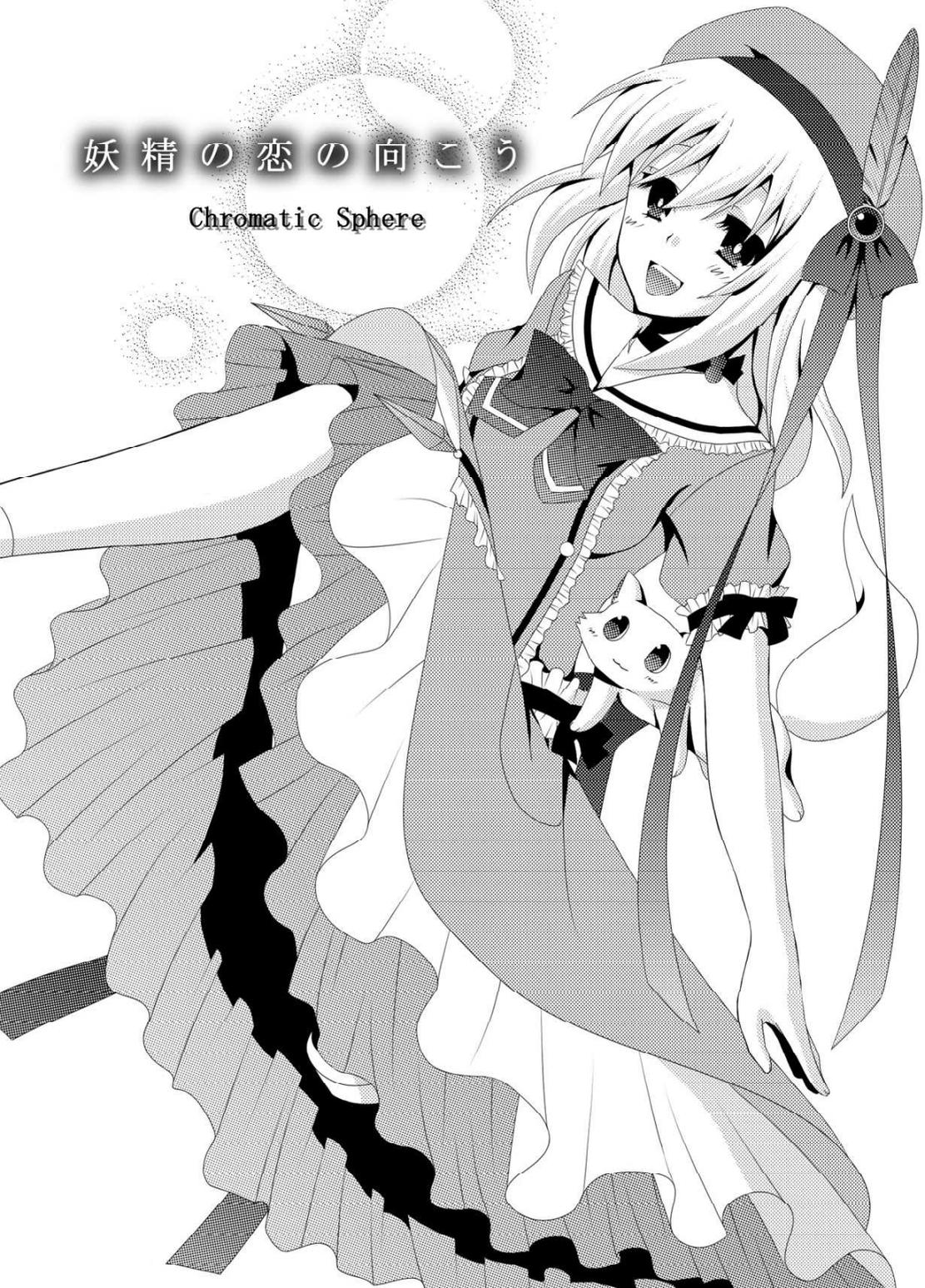


妖精の恋の向こう

Chromatic Sphere



ある日曜日の昼間、川崎かわさきあめりは洋服店の更衣室で試着をしていた。

「ちよつとイメチェンしてみたけど、どう？」

コートフックにかけたバッグへ、彼女は話しかけた。姿見の向こうには、黄色いサンバイザーをかぶり、スパンコールで文字が形取られた白いTシャツを着て、そしてデニムのショートパンツを履いた少女が映っている。

『おお、今まで見た事のないあめりちゃんじゃない』

透き通った少年の声が彼女の脳内へ直接伝わった。

「イメチェンだから当たり前でしょう。で、シャリーー、どうかな？」

彼女はバッグの方に顔を近づける。

『いいと思うよ。いつもより動きやすい感じがするし』

「うーん、そうじゃなくってー」

不満そうに、彼女はバッグの中へ手を伸ばし、両手で猫のぬいぐるみのような生物を掴みあげる。全身が真っ白で毛がなく、掴んだ感触はまるでビーズクッションみたいだ。全長四十センチほどの細長い身体が現れる。

「かわいいとか、似合うとか、そんな意見が欲しいんだけど」

シャリーーと呼ばれた生物と彼女の顔がくつつきそうだ。シャリーーは彼女の真っ直ぐな瞳に気を取られてしまった。んー、と言いながら彼女は答えを催促する。

『似合うと思うよ。ただ、その……』

微笑んだまま、あめりは首をかしげる。

『あめりちゃんの目に吸い込まれそうだったよ。やっぱりすごく綺麗だね』

彼女は顔を赤くし、シャリーーをきゅつと胸元に抱き寄せた。

「それを言われるととても嬉しいなあ」

むき出しの白い腕から伝わる、熱い体温を感じながら、シャリーーは顔を上げた。

『君はとても積極的で、それが今の衣装に現れているよ。結構似合っていると思う』

下半身が腕の中に埋もれた状態で、彼は彼女の脳内へテレパシーを送った。

「それは良かった。もう夏だから、軽い服の方がいいんだよねー」

そう言いながら、彼女はシャリーーをバッグの上に置いた。短パンを脱ぎ、買いた物かごの方へ手を伸ばす。

「じゃあ今度はこれだけ——」

かごから、フリルがいつぱい入ったスカートを取り出して、さつと脚を通す。上半身は白いTシャツから桃色のノースリーブに着替えていった。さらに、その上にサテンのブラウスを羽織った。

『これはいつものあめりちゃんだね。まるで魔法少女みたいだ』

「私もこれが一番落ち着くね」

アクティブな雰囲気から一変し、パステルカラーを基調とした可愛らしい少女の様相へ彼女は変わった。シャーリーはびよんとバッグから飛び出し、あめりの脚をよじ登った。

「こらあ、くすぐりたいよう」

彼女は脚をよじらせるが、それを気にせずにシャーリーはスカートにたどり着き、上半身前面を一気に登って、肩に到達した。

『ここにいるととても落ち着くよ』

あめりと一緒に、彼も姿見に対面した。彼は鏡の向こうから、彼女の微笑みを受け取った。

突然、店の外から何かが崩れる音が聞こえてきた。

同時に、足下から細かな振動が伝わった。

『これは……魔物が近くにいるよ！』

即座にシャーリーが反応した。

「ええつ、こんな時に？ シャーリー、ここで変身しよう」

彼女の合図とともに、更衣室の中が光り輝いていく。半畳のスペースが別世界へと変貌していった。

音の源は商店街の西側からきていた。そこは衰退が激しく、廃屋の目立つエリアで、砂埃が舞い上がっていた。

「なんだこれ、地震か？」

「ビルがボロいから崩れたのか？」

平和な街に落とし込まれた異変が人々の理性をかき乱す。ある人は頭をかばんなどで保護し、またある人は大急ぎで逃げていった。砂埃が落ち着くと、瓦礫から、紅い肌をした巨人が姿を現した。高さは十メートルを超えており、四階建ての建物に匹敵している。ぼろ切れのような衣を全身に纏った巨人は猛獣のような雄叫びを上げた。その後、周囲のビルをどんどんなぎ倒し、辺りを練り歩き始めた。

巨人の足跡が商店街の石畳の道を潰していく。逃げた人がどんどん増えていく。寂れたエリアのためか、

巨人の周辺は人が少なかつたが、街全体を混乱に陥らせるには十分な衝撃だつた。巨人の周辺からどんどん人が散っていき、混乱は商店街全体に渡広がつた。

「あつ！」

慌てて逃げようとした、小学生くらいの子が道端で躓いた。立ち上がるうとするも、巨人が彼女の方へ歩み寄っていく。彼女と巨人の距離はほんの数メートル。巨人が数歩歩けば彼女に手が届くだろう。近づいてくる巨人の恐怖に怯え、女の子は立ち上がれなくなつてしまつた。

「ほら、逃げて！」

女の子の母親らしき人が動けなくなつた娘を捕まえ、おぶろうとする。しかし、もう巨人の右手は親子へと伸びていた。母親は勇気を振り絞つて、娘を背中に乗せて走ろうとするが、このままでは二人とも巨人に捕まってしまうだろう。

そのとき、一筋の光が巨人の手を貫いた。電信柱に近い大きさの白い槍が地面に刺さり、光り輝いている。

「そこまでよ！ 大人しくしなさい」

アーケードの入り口から、荘厳な衣装を纏つた少女が歩いてくる。フリルがいっぱいの、水色のワンピース

スを着たメルヘンチックな姿の少女。右手には、大きな紫色の宝石で飾られた、真鍮の杖が握られていた。左肩には、猫に似た生物——シャリーが乗つていた。逃げゆく人々に逆らつて悠然と巨人の方へ向かう彼女の姿は、可憐な見た目と反して、力強く感じる。巨人の手が固定された位置で、彼女は杖を巨人の方に向け、こう言い放つた。

「混沌の次元から現れし魔物よ。このアメリカ・アメジストが成敗する！」

その後、少女は親子へすぐに逃げてと言ひ、巨人の目の前に立ちはだかつた。右手を槍で固定された巨人は、左手を伸ばしていく。その巨大さからは想像もつかない素早さで槍を掴み、一気に引き抜いた。少女はその隙を突いて、巨人との距離をさらに縮め、彼女の肩にしがみついているシャリーに声をかけた。

「シャリー、シーグリッドをお願い」

シャリーは尻尾を伸ばし、その先端を青く輝かせた。青い光はシャリーの尻尾を、体を包み込み、一気に消滅した。代わりに、巨人の全身が水色の網で覆われ、地面に張り付けられてしまつた。その拘束を解こうと巨人はもがくが、びくともしない。

「よくやったわシャリー。とどめを刺すよ」

ワンピースの少女は杖の先端を巨人に向け、日本語とはかけ離れた呪文を唱えた。力強く、だけど透き通った旋律が彼女の口から紡ぎ出される。そして、呪文が終わり、次の言葉が放たれた。

「悪しきものを浄化せよ！」

杖の奥から光が生まれ、段々と膨張していく。そして、光は彼女と巨人の間で爆発し、巨人の身体のみを四散させた。少女は宙を舞い、巨人の肉片とともに地上に降り立っていった。

荒れ果てた戦場にはもう、活気のある商店街の面影はなかった。建物が壊され、看板の残骸が散り、道に敷かれた石畳は巨人のせいで粉々に砕かれていた。巨人が手をつけていないエリアも、ほとんどの人が避難しており、まるでゴーストタウンみたいな寂寥感がある。その中で彼女は、ため息を一つついた。しかし、それは失望ではなく、安堵のため息だった。

その後、また不思議な事が起こった。巨人によって破壊された建造物が一瞬にしてもとに戻っていく。散っていった肉片も消滅していく。逃走途中で躓いた人の擦り傷が消えていく。初めから巨人の襲来がなかったかのように、戦闘の痕跡は抹消された。

『今日も無事に魔物を退治できたね』

肩の上でシャーリーは安心し、少女に語りかけた。「うん、しかしどれだけ暴れても最後に街が元通りになるなんて相変わらずすごいね」

『魔物による物的変化は可逆的なんだ。もつとも、それは魔物のオーラが存在しなくなった場合で、僕のものも必要なんだけどね』

「そうなんだあ。じゃあ魔物は毎回倒さなくちゃいけないね……おっと、変身が解けちゃう」

少女の服が再び輝き始めた。メルヘンチックな衣装が、服屋で着ていた服に変わっていく。荘厳な杖が消えた代わりに、白いシールドバッグが肩にかけられた。彼女——魔法少女の正体はこの地球上の人々に知られる事はない。何故なら、戦いが終わると、周囲の人々から、魔物と魔法少女に関する記憶が消えるからだ。

「あれ、もう暗くなってきた」

「時が経つのは早いねえ」

街中にいる人々はみな、何事もなかったかのような表情で空を見上げた。魔物と遭遇したところか、最初から悪い夢すら見ていなかったように見える。

「あめりちゃん、今日の晩御飯は何になるの？」

「多分ハンバーグだと思うよ。冷蔵庫にタネがあった

し」

「わお！ シャーリー、ハンバーク大好き！」

「帰るまでは大人しくするんだよ」

普通の高校生に戻った川崎あめりと異世界からやってきた妖精シャーリーは、疲れを感じぬ足取りで帰路に就いた。

シャーリーがあめりと出会い、魔法少女が誕生したのは三ヶ月前の事だった。

シャーリーが住むアクオートという世界では、魔界パイロスの魔物が侵略をしていた。空を覆う怪鳥、建物を潰す巨人、地面から伸びる触手がアクオートの住民を弄び、ついには捕食した。このようなおぞましい異型を相手に、住民は命がけの戦鬪を繰り広げた。接戦の末、侵略を防ぐ事に成功したが、紛争で発生したおびただしい数の魔法が次元をゆがめ、多数の魔物を別の世界へと送り込んだ。その次元のゆがみに、シャーリーは魔物とともに巻き込まれてしまい、右も左も分からない人間界に飛ばされていった。

アスファルトの地面に降り立った彼はまず、生物が

いて、文明が発達している事に安心した。走る自動車に驚き、生物と勘違いしたりもした。何も無い地はどう生きればいいのか分からない。生きる術のある世界で良かったと思つた。

しかし、彼は休む暇もなく蛇型の魔物と遭遇してしまった。悲鳴を上げる人々を捕まえようと蛇は道路を這つていく。シャーリーは反射的にシーグリッドを張つたが、ここで自分の無力さを思い知つてしまった。彼は魔物を拘束する事はできても、彼自身で魔物を倒す術がなかったのだ。撃退魔法を唱える能力も、武器を持つ事もできない。シーグリッドの網による拘束が緩みつつある魔物を前に、彼は絶望した。

やがて、魔物は拘束を解き、獲物捜しを再開した。奴に食べられないよう、シャーリーは路地裏に身を隠し、魔物が姿を消すのを待った。アスファルトがこすれる音がいつまでたつても止まなかった。それから、一人の少女の悲鳴が彼の耳に届いた。彼女をできたら救いたい、僕が撃退魔法を使えればいいのにと彼は思つた。

(もし彼女が魔法を使えたら――)

一瞬で、シャーリーの願望が一つに繋がった。自分で魔物は退治できないが、他の種族を媒介して魔力を

武器にする事はできるかもしれない。少女の悲鳴と魔物の這う音が止まないうちに、彼はすぐさま行動を始めた。

シャーリーは再びシーグリッドを放ち、蛇型の魔物を網に絡めた。動きが封じられた胴体に沿って、彼を道を駆けていき、獲物になりかけた少女をついに探し出した。長袖のセーラー服を着た、セミロングの茶髪の少女は、涙を浮かべて地面にへたり込んでいた。

『やっと思つた！』

その台詞を聞いた少女はさらに怯えてしまった。異型の魔物に追いかけられた彼女は、可愛らしいとはいへ現実存在し得ない生物をもう一匹の敵だと思いつ込んでいた。

「やめて、私はまだ死にたくない」

彼女は必死に声を絞り出した。

『安心して、僕は君を食べたりしないよ』

シャーリーのとっさの弁明を少女は無我夢中に信じ、緊張を少し緩ませた。

『僕はあの魔物を倒したいんだ。そのために、君が欲しい』

何故自分に助けを求めなのか、彼女は彼が言っている事を理解できなかった。

「私には何もできないよ。あの蛇をどうやって倒すの？」

『それは僕の力を合わせる事でできる。いくよ』

確証はないが、彼の中にはどこからか自信が湧き出していた。彼女は彼の考えを呑み込めていないみたいだが、とにかく頷いた。

シャーリーの言葉の後に、蒼白い魔力波が彼と少女を包み込んだ。何の変哲もない通学路が、たくさんの魔力で輝く空間に変わり、少女はただ驚いた。

『君に力を与えるよ』

シャーリーの魔力がそつと少女に伝搬された。すると、少女の全身が光り輝き、彼女自身はびっくりした。輝きは段々と落ち着いていき、空間がもとの通学路へと戻っていく。そして、彼女は自身の姿の変化に再びびっくりした。

身につけていたはずのセーラー服が、フリルのいっぱいついたワンピースになっていた。黒のローファーが白のローヒールに変わり、頭には一枚の虹色の羽根が飾られた帽子があった。そして、右手には、紫色の宝石で目立つ杖が握られていた。

「これってどういう事？」

『君に力を与えたんだ。今ならあの魔物を倒せるよ』

シャーリーが言い終えたところで、魔物の頭が動き出した。二度目のシーグリッドが既に破られてしまつたようだ。

『危ない！』

蛇が少女にかぶりつくより早く彼女は反応し、突撃する魔物の頭を回避した。

「これって——」

あまりにも俊敏な回避をした事に彼女自身が驚いた。攻撃を回避された魔物は、尻尾で少女をなぎ払おうとした。鞭のようにしなやかに動き出す尻尾を、彼女はジャンプで回避した。

「すぐく身体が軽い。私、魔法少女になったみたい」

『魔法少女か。いい言葉だね』

ワンピースのポケットからシャーリーが現れた。

「猫さん、いつの間にか私のポケットに」

魔物の攻撃を避けながら、彼女は少し驚いた。

『次は攻撃しよう。魔物の胴体に杖を突き刺してみて』

「えっそんな！ 怖いよ」

『魔力で力がついた君ならできるよ。大丈夫』

シャーリーに促された通りに、彼女は魔物の胴体に近づいた。自信のなさそうな表情を浮かべながら、彼女は思い切つて杖を胴体に突き刺した。胴体を傷つけ

られた魔物は暴れようとした。

『杖を放しちやダメだよ。もう一度こいつの動きを止めるから』

青い網の代わりに、今度は白い電流が生まれ、魔物の長身を駆け巡つた。杖を払おうとした魔物は身体が痺れて動かなくなつてしまう。

『今から僕の言う言葉を繰り返して——』

少女が頷くと、シャーリーは彼女の脳内に異国の旋律を送り込んだ。発音がしやすく、短い言葉であるものの、彼は彼女がその言葉を声に出せるか不安だった。しかし、彼女は言われた通りに異国の呪文を復唱する。心が落ち着く、清らかな言葉だった。

彼女の呪文が終わつた途端、魔物の皮膚が朱色から灰色に変化していった。活力が失われ、魔物の動きが止まり、瞳から色が失われていく。そして、灰色になりきつた魔物は塵となって消失した。

戦いの後に残されたのは荒れた通学路だった。ひび割れたアスファルトや潰された自動車とその激しさを物語る。

「あの魔物を、私が倒したの？」

魔法少女は呆然とした。

『そう、君がああ蛇型の魔物を倒したのさ。僕だけで

はできない事を君がやってくれたんだ』

シャーリーは彼女を心から讃えたが、彼女は今日の出来事が未だに信じられないようだった。自分の服装をじっくりと眺め、再び驚いた。

『こんなアニメみたいな出来事って夢みたい。こんなふりふりした服と杖ってコスプレみたいだよ。猫さんも喋るし』

『僕の名前はシャーリーって言うんだ。それより、コスプレとかアニメって何だい？』

『コスプレはアニメのキャラクターの衣装を着て、それになりきる……ってシャーリーはアニメも知らないの？』

案の定、シャーリーは首をかしげていた。

『ついさっき、別の次元からここにやってきたからね。』

『この世界は知らない事いっぱいなんだ——』

シャーリーはアクオートから偶発的にこの世界へ飛ばされた事、そして魔物が一緒に飛ばされている事を丁寧に説明した。

『だからこの世界には他の魔物もいるかもしれない。アクオートの戦闘で魔物をかなり倒したけど、それでも数え切れないくらい存在する』

『じゃあ、この地球にはもういっぱい魔物がいるんだ』

『全部ここに飛んできたとは限らないけどね。それでも厄介だよ』

シャーリーはため息をついた。

『そんな……私達の世界がこんなめっちゃくちゃにされるのは嫌』

彼女が言った瞬間、少女の衣装が、通学路が再び光り輝いていく。

『何これ！』

その光景にシャーリーも心底驚いた。まさかこんな現象が起こるなんて思ってもみなかったからだ。

少女と周囲の輝きはしばらくしてから落ち着いた。彼女はもとの女子高校生に、通学路は元通りに修復されていた。

『これって、一体どういう事？』

『多分、君の願いが魔力によって形になってきたんだ。魔物による物的変化は可逆的なのは知ってるけど、それにしてもすごいなあ。君は魔力への適合性がとても高いよ』

彼の彼女に対する興味が一層増していった。

『すごい！ 本当に魔法少女になったんだ。夢みたい』

彼女は今の出来事にただただ感心した。

『ところで、君にお願いがあるんだけど。僕、帰る家

がないから、住む場所を探しているんだ。それでしばらく泊まってもいいかな？」

「いいけど……変わった猫さんだから親にはどう説明しようかな？ 魔法少女になっちゃった、っていうのも信じてもらえないし、というかあの衣装はちよつと恥ずかしい」

少女は顔を赤らめ、少し考えた。

「シャーリー、うちにおいでよ。私が飼うから」

シャーリーは居場所ができた事ではあつと明るくなつた。

『ありがとう。とても助かるよ。それで、君の名前を知りたいんだけど』

「私は川崎あめりっていうの。よろしくね」

こうしてあめりとシャーリーは巡り会い、魔法少女として戦い続ける事になった。

買い物をした日の夜、シャーリーはあめりのベッドの中で、彼女と出会った時の事を思い出した。異次元への突入、人間界での魔物の出現、そして魔法少女の誕生と、お互いにとつて驚きの連続だった。

『君に出会えて良かったよ』

薄暗い部屋の中で、彼はあめりの気持ちよさそうな顔を見つめた。

「私も、君に会えて良かった」

どちらから見ても、相手は命の恩人だ。さらに、あめりの場合、彼のおかげで、小さい頃からの憧れである魔法少女になれた。

シャーリーが初めて彼女の魔法少女姿を見たとき、彼は非常に驚いた。彼が彼女にかけた『魔装の術』は、被術者にとつて理想的な戦士の装備を創りあげる術で、アクオートでは大抵、板金鎧の姿になる被術者がほとんどだった。しかし、あめりの場合、これまで彼が見た被術者とは違う姿に変わっていた。彼はその姿が戦闘に有利だと思えなかったが、実際は華麗さだけでなく強さも併せ持っていた。彼は魔法少女に魅せられていた。

蛍光灯の豆灯が彼女の細い肩をほのかに照らしている。戦いの時はいつも、その肩の上になががいた。彼女の激しい動きで振り落とされそうになる事もしばしばある。しかし、彼女への信頼のおかげで、そこでは恐怖を全く感じなかった。体内でほとばしる興奮を彼は感じた。ずつと彼女の笑顔を見続けたいと思つた。ず

つと彼女と暮らしたいと思った。

彼女の傍以外に、居場所を考えられなかった。この地球上で彼の存在を唯一知る人で、彼も彼女以外の人を知らない。アクオートに戻れなくとも、自分の事を大切にしてくれる彼女とならずつと付き合いたいと思った。

シャーリーはあめりに恋をしていた。